

校長 菊田勇雄

## 秋空や高きは深き水の色

(松根東洋城)

台風17号が去った翌日から、相馬の空は晴天が続いています。久しぶりに眩しいほどの青空が広がり、その下で行われていた体育の授業では、生徒たちが懸命にサッカーボールを追いかけていました。若さ溢れる動きや友人と楽しそうに語り合う姿は、爽やかな空のように青春そのものです。

さて、3年生のAO・推薦入試が本格的に始まりました。受験が決まった生徒が受験願に押印を求めて校長室に来た際、必ず志望理由を尋ねることにしています。「自分がなぜこの大学・短大・専門学校を目指すのか？」生徒たちには改めて自分に問いかけ、根拠に基づいた自分の言葉で伝えられるようアドバイスしています。また、自分が進む専門分野に関する一歩踏み込んだ理解や将来の明確な目標がなければ、説得力のある話はできません。今後、早期の取組がますます必要になるでしょう。青空を見上げつつ、3年生の健闘を祈る今日この頃です。

## 「教育人材」言葉の由来について

今回は校長室にある「教育人材」の扁額について、言葉の由来を考察します。まず、相馬中村藩第二十七代藩主の益胤(ますたね)が創設した藩校育英館の『学規』に、この言葉を見出すことができます。文政五(1822)年、育英館は藩士海東驥衡を初代教頭として、菩提所の長松寺(現在は洞雲寺)境内に置かれました。その背景には中村藩の財政窮乏があり、藩政の急務は財政再建と人材育成にあるという益胤の認識がありました。

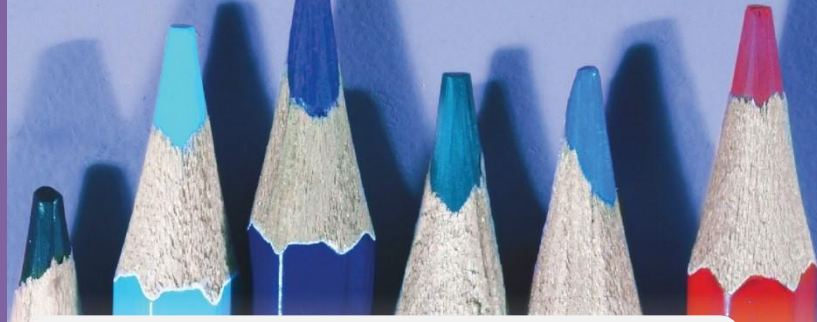
次に幕末から明治の初め、中村藩の最高政治顧問であった慈隆という僧侶の言葉に見出すことができます。慈隆は日光山輪王寺浄土院の住職から中村藩に招聘され、第二十八代充胤(みちたね)と最後の藩主誠胤(ともたね)の二代に仕えました。慶応四(1868)年一月、鳥羽伏見の戦いにより戊辰戦争が始まると、国内は旧幕府勢力と新政府勢力に二分されますが、周囲を大藩に囲まれた中村藩は小藩のため、内戦の混乱に巻き込まれ困難な舵取りを余儀なくされます。その存亡の危機を救ったのが慈隆でした。旧幕府方の奥羽越列藩同盟軍を離脱し、新政府方に加わり謝罪と恭順の意を示すことで領地を安堵しました。戊辰戦争後の政治改革の際に慈隆が藩主に提出した『政記』には、「育人材」の項目を設け教育の重要性を説いています。また、戊辰戦争直後、人々が中村城を修繕し堀を深くし防壁を高くしようとした時、慈隆は『一城を以て国家の安きを図る、寧ろ人材を育し、以て其の基を堅うするに如かず』と述べて中止させました。

孫其昌に「教育人材」の揮毫を依頼した人物には、『育英館学規』や慈隆の『政記』にある「教育人材」の言葉が念頭にあったことは間違いありません。教育に熱心な相馬の土地柄は、藩政時代から今日に至るまで、脈々と引き継がれています。

僧慈隆の肖像画



令和元(2019)年9月27日



## 第3回大学教授による課題探究型ワークショップが行われました

9月11日、1年理数科の生徒

を対象に「大学教授による課題探究型ワークショップ」が行

われました。福島大学共生システム

理工学類の島田邦雄教授をお

招きし、『磁場や電気で液体を

扱ってみよう』をテーマに講義並びに

演示実験がありました。島田先生が開発したMCFゴムの実験では、

光や振動を与えると発電する不思議なゴムに、生徒たちも目を輝かせていました。難解な話を分かりやすく、

かみ砕いて楽しそうに説明する島田先生に、科学者としての姿を見た思いでした。島田先生のお話

に生徒諸君は探究心を呼び起こされたのではないかと思います。生徒諸君にはこのワークショップを通じて、2

年次に取り組む課題研究のテーマについて、さらに深く

考えて欲しいと思います。



## 心の健康講話が行われました

8月28日(2年生対象)と9月17日(1年生対象)に「心の健康講話」が行われました。講師に相双保健福祉事務所障がい者支援チーム保健技師の年野朋美さんをお招きし、「心を元気にする生活」をテーマにお話をいただきました。心とストレスの関係、心の不調のサイン、回りにSOSを出す方法、心の健康を保つ生活習慣等について大変参考になる内容でした。ワークシートで自分の心の疲労度をチェックしたり、エゴグラムチェックシートを活用してプロフィールシートを作成し自分の性格を分析したりと、生徒の活動も取り入れながら行われました。生徒諸君には悩みがあったら一人で抱え込まず誰かに相談することで、心の健康を保つよう心がけて欲しいと思います。



## いきいき茨城ゆめ国体で躍動 ビーチバレーで立谷・森組5位入賞

9月15日、第74回国民体育大会「茨城ゆめ国体」のビーチバレー競技少年男子に福島県代表として出場した本校の立谷純太郎・森謙志郎組は、予選リーグCグループを1位で通過、決勝トーナメント1回戦で石川県を下し、2回戦で和歌山県に勝利し準々決勝に進みました。準々決勝では惜しくも愛知県に敗れましたが、5位・7位決定戦で愛媛県を下し、見事5位に入賞しました。トレーニングの一環としてビーチバレーに早くから取り組み、その努力が報われました。



## 「まほろん」で郷土部の常設展が開催!

9月25日から12月8日まで福島県文化財センター白河館「まほろん」において、「相馬高校郷土部のキセキ展」が開催されます。伝統ある郷土部の活動の軌跡について知ることができる興味深い展示です。ぜひ足をお運びください。また、9月28日には館長講演会が行われ、郷土部員がゲスト報告者として発表し、菊池徹夫館長と対談することになっています。

## 同窓生列伝⑤ 折笠晴秀 (1885-1965) 続編 ～泌尿器科の世界的な権威として～

明治45年、東京帝国大学医学部を卒業した折笠晴秀は、大学の細菌学教室・皮膚泌尿科教室で研究生活を送った後、阿久津病院、順天堂医院勤務を経て、昭和4年に独立し外科・泌尿科専門の折笠医院を開業しました。その間、患者の診察と治療に携わりながら、『日本泌尿器科学会雑誌』等を中心に臨床研究の成果に関する論文を数多く発表しました。昭和12年には「結核菌の腎臓通過に関する実証的研究」により、泌尿器科学で優秀な業績をあげた医師に贈られる坂口賞の第一回受賞者となりました。また同年出版した『尿の病気に苦しむ人に』は、長年の研究の集大成でもありました。

ところで、昭和11年に東京在住卒業生による母校訪問団が、昭和12年に京浜馬城会会員が相馬中学に来校しましたが、両方に折笠が加わっています。さらに昭和14年8月の馬城会総会では規約が改正され、校長を会長に推戴することを止め、卒業生から会長を互選することとなり、折笠が初代会長に選出されました。娘の俊子さんの証言によれば、折笠は学業成績が優秀であるが家が貧しく進学できない卒業生を自宅で面倒見ながら、住み込みで学業を継続させました。

太平洋戦争中の昭和19年、身辺に危険が及ぶことを覚悟した折笠は、医療器具と家族を故郷の小高町女場に疎開させますが、昭和20年、東京大空襲で病院を失い、その後、静岡県湯河原町に病院を移転しています。戦後、泌尿器科の世界的な権威であった折笠に、秩父宮雍仁親王の執刀医として白羽の矢が立つことになるのです。

疎開中の折笠夫妻（孫の京子とともに女場の生家にて）



## 本校の伏見教諭が東北・北海道高校 理数科教育研究協議会で発表しました

9月12日から13日まで岩手県一関市文化センターにおいて、第44回東北・北海道高等学校理数科教育研究協議会が行われました。1日目の数学会では、伏見裕樹教諭が本校の取組について発表しました。発表内容は数学科の取組として、本校生徒が地域の中学生に学習指導を行う「ピア・チューター方式による数学の学習指導」を中心とした教育実践でした。昨今、高大連携に関する取組が脚光を浴びていますが、本校の取組は中高連携に的を絞ったものとして効果的な取組である等の肯定的な意見や指摘をいただきました。今後もこの取組の深化発展に努めていきたいと思っております。

発表する伏見教諭



## 「水の女王」前畑秀子の来相について

今年のNHK大河ドラマ「いだてん」は、日本人で初めてオリンピックに出場した金栗四三と、1964年東京オリンピックの招致に尽力した田畑政治を主人公に物語が展開しています。直近ではベルリン大会の水泳女子200m平泳ぎで金メダルに輝いた前畑秀子が話題になりました。国民の大きな期待に苦悩する前畑が、数々の困難を乗り越えて、女性初の金メダリストとなる姿は感動的でした。1914（大正3）年、和歌山県橋本町で豆腐屋を営む両親のもとに生まれた前畑は、小学校卒業後は家業を継ぐつもりでしたが、水泳の才能が認められ、関係者の尽力で名古屋の女学校に入学し水泳を続けました。両親を相次いで亡くしながらも、1932（昭和7）年、ロサンゼルス大会の200m平泳ぎで銀メダルを獲得、その後、引退も考えましたが、東京市長永田秀次郎に説得され現役を続行し、1936（昭和11）年、ベルリン大会で優勝を果たしました。その3年後の1939（昭和14）年、結婚して一線を退いた前畑が相馬を来訪しています。宇多川の仮設プールと原釜海水浴場で町民にその妙技を披露しました。また滞在中は相馬高等女学校の生徒に実技指導を行い、中村第一小学校ではオリンピックの思い出について講演を行いました。講演には相馬中学の生徒も多数参加しました。ではなぜ前畑は相馬に来たのか？その手掛かりになる人物が、当時相馬中学で教鞭を取っていた香取文夫先生です。香取と前畑の夫の兵藤正彦氏は実の兄弟で、香取にとって前畑は義理の妹に当たります。兄弟の実父丸尾錦作は学習院教授、東宮侍従、皇孫御養育掛長、宮中顧問官を歴任した人物でした。当時、兵藤は軍医として戦争に召集されており、出征前の休暇を利用して夫婦で相馬を訪問したのです。すでに始まっていた日中戦争が、国民生活に暗い影を落とし始める中、「水の女王」の来訪に相馬の街は大いに盛り上がりました。

前畑の来相を報じる『福島民友新聞』

